

ソーシャルワークにおけるミクロからマクロへの連動性に関する原理の考察 ーメゾレベルへの働きかけに着目してー

○ 川崎医療福祉大学 氏名 直島 克樹 (6815)

キーワード3つ：ミクロメゾマクロ、連動性、ストレングス視点

1. 研究目的

新型コロナウイルスの感染が拡大する中で、日本社会の持つ様々な不平等や抑圧の構造が浮き彫りにされている。仕事を失う人々、学びを奪われる子どもたち、DV や虐待など生命の危機にある人々の困難さなどは、決してその人個人のレベルに起因するものではない。誰にでも起こり得るその困難な状況が、社会全体の構造との結びつきや仕組みそのものから生じているという視点を、多くの人々の記憶に刻むことになったのではなかろうか。

そのような状況の中で、ソーシャルワークが果たすべき役割は決して小さいものではない。2014 年に新たに採択されたソーシャルワークのグローバル定義からも明らかなように、社会変革や社会開発が第一に強調されている点は見逃せない。また、日本の政策においても、単なる個別の相談支援だけでなく、地域づくりと一体化した対応を求めている。

その一方で、ミクロからマクロに連動するソーシャルワークの理論枠組みに関する検討が十分に行われてきたかと問えば、必ずしも十分であったとは言えない。コミュニティソーシャルワークも、地域を基盤としたソーシャルワークの両者とも、ミクロからマクロレベルへとつなぐことの重要性を位置付けてはいる。しかし、その連動性に基づいたソーシャルワークの理論的検討が十分になされているかどうかの検証は必要であろう

そこで本研究では、第一に、近年のソーシャルワークに関するミクロからマクロへの連動性に着目した研究に焦点を当て、そこで指摘されている点について整理していく。そして、そのミクロからマクロへの連動性において、システム論やストレングスといった重要な概念がどのように結びつくのかを検討し、ソーシャルワークの持つ変化への力動性に関する考察を深めていくことを目的としている。

2. 研究の視点および方法

本研究では、ソーシャルワークがミクロからマクロへの連動そのものであるという点に着目し、その連動性を図式化することによって、ミクロとマクロの中間に位置するメゾレベルの重要性を検討していく。また、この連動する構造において、システム論やストレングス概念がどのように接続される可能性があるのかという点を、文献研究に基づいて検討することによって、ソーシャルワークのミクロからマクロを分断しない理論構築への考察を試みている。

3. 倫理的配慮

文献研究に関し、先行業績としての他説と自説との峻別を明確にするようにし、日本社会福祉学会が定める「研究倫理規定」に基づき配慮した。

4. 研究結果

第一に、近年の日本におけるコミュニティソーシャルワークや地域を基盤としたソーシャルワークに関する研究は、相談支援と地域づくりを一体的にとらえることを主張している。その意味で、ミクロからマクロレベルへの力動への方向性を確認することができたが、その力動を積極的に理論化していこうとする研究自体はほとんど見られなかった。そこで、コミュニティソーシャルワークと地域を基盤としたソーシャルワークに関する先行研究を改めて整理することによって、メゾレベルが媒介となるミクロからマクロレベルへの連続性かつ流動性あるソーシャルワークのモデル図を見出した。このモデル図は実際の支援ケースの方向性を示す上で有効であり、今後の考察の枠組みとなる可能性が示唆された。

第二に、このモデル図は、従来のソーシャルワークが依拠してきたシステム理論に留まることなく、新たなシステム理論を用いた考察を可能とすると共に、ストレングス視点がメゾレベルを醸成し、ミクロからマクロレベルへの循環が活発化する理論的可能性を持つことを示唆していた。ここではストレングス視点を、「変化の可能性を高めるつながり」として位置づけることにより、つながりが生み出す力動性への考察の可能性が開けていくことが見出された。

5. 考察

個人や家族への直接的な働きかけをミクロ、関係機関や地域組織などとのネットワークや協働をメゾ、行政や政治等への働きかけをマクロとして位置づけて考えると、例えばメゾへの働きかけがミクロを活性化し、それがメゾをさらに活性化することにより、マクロへの働きかけが実現するなど、それぞれが高め合う力動を生み出す点にソーシャルワークの特徴を見出すことが出来る。この力動の原動力となるのがメゾレベルでの取り組みであり、ソーシャルワークの焦点とする権利等を取り戻す力の源泉であると考えられる。

また、困難な課題が生じている状態は、システム理論からすると、システムが閉鎖的かつ硬直した状態にある。ストレングス視点は、その硬直したシステムに開放性とゆらぎをもたらし、そのゆらぎをいくつも作っていくことで状態を変革していく視点となり得る。本研究でのモデル図に従えば、開放的なむすびつきを持ってメゾレベルを醸成していくことを、ストレングス視点をもって進めていくことが必要なのである。

そして、ミクロからマクロを連動させて常に変革を狙う枠組みは、ソーシャルワークが民主主義を高める専門技術であることを貫徹させるものである。ソーシャルワークは、常に下からのボトムアップによる変革を実現するのであり、本研究で示したソーシャルワークのモデル図は、まさしく民主主義の実現を目指す道標になるといえよう。

※ 本研究は JSPS 科研費 20K13749 の助成を受けたものです。